

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A)

平2-216279

⑬ Int. Cl.³

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 平成2年(1990)8月29日

D 06 M 15/53

8521-4L

D 01 F 11/08

6791-4L

D 06 M 11/36

8521-4L

13/00

8521-4L

15/643

// D 06 M 101:36

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全6頁)

⑮ 発明の名称 表面変性全芳香族ポリアミド繊維

⑯ 特 願 昭63-259516

⑰ 出 願 昭63(1988)10月17日

⑱ 発 明 者 牧 野 昭 二

大阪府茨木市耳原3丁目4番1号 帝人株式会社繊維加工
研究所内

⑲ 出 願 人 帝 人 株 式 会 社

大阪府大阪市東区南本町1丁目11番地

⑳ 代 理 人 弁 理 士 前 田 純 博

明 細 書

1. 発明の名称

表面変性全芳香族ポリアミド繊維

2. 特許請求の範囲

繊維表面に固体状のカチオン変換性及び非イオン吸着性の無機化合物が固着されてなる全芳香族ポリアミド繊維の表面に15℃以上の温度で融状を示す分子重 10000以上のポリオキシアルキレン含有のポリエーテル系化合物からなる被膜を有し、該被膜の上に該ポリエーテル系化合物と非相溶でかつ分子重が 900以下の脂肪族系潤滑剤及び/又はシリコーン系潤滑剤の層を有することを特徴する表面変性全芳香族ポリアミド繊維。

3. 発明の詳細な説明

<産業上の利用分野>

本発明は表面強度の改良された全芳香族ポリアミド繊維に関する。更に詳しくは繊維束を纏り合せて用いるコードやロープ等の用途において、その耐摩耗性に優れ、かつ磨耗率保持率の優れた

全芳香族ポリアミド繊維を提供するものである。

<従来技術>

近年、全芳香族ポリアミド繊維は有機繊維の中にあつて、特に、高強度、高モジュラス、高耐熱性、高耐薬品性などといった優れた特性を生かして諸分野での新しい用途に実用化がなされてきている。

しかしながら、かかる繊維は分子の配向や結晶性が高いが為に繊維軸方向には、その力学特性は卓越した性能を発揮するものであるが、その反面、繊維軸と直角方向においては意外にもろいという弱点も明らかとなっている。

特に繊維同士の間隙や他の物体との間隙により、容易にフィブリル化が生じ、繊維が摩耗しやすく、従つて磨耗のような工程を経ると強度に劣った強度が大きく低下し、所謂、強度保持率が低いという欠点を示す。

これらの問題を解決する為に磨耗方法や磨耗条件などの物理的な方法で改善しようという試みがなされているが繊維の表面特性との関係について

つ15℃以上の温度で液状のものをいう。

この分子量が10000を超えないものではここに目的とする繊維表面の耐摩耗強度の高いものが得られず、又、15℃以上の温度で液状でないと繊維上への付与に際して取扱いがむづかしいばかりでなく、繊維の後加工の際にいわゆるスカムと呼ばれる固形物による糸導等への堆積汚れの原因となり好ましくない。

かかる高分子量エステル化合物はその分子構造から高粘性でありその液膜の強度が強く、極圧下での潤滑性を高める。従って整糸等の作用により繊維間に高接圧がかかっても繊維間の自由度がある。即ち繊維間摩擦力を低減し、繊維表面の耐摩耗強度を高めて整糸による強力低下を抑える。

しかし、この反面、粘度が高いためにこの生成膜を有する繊維は、糸導ガイド頭上を走行する場合には走行摩擦が高くなり、整糸が糸導ガイド頭にとられて毛羽が発生したり、粘着性スカムとしてのガイド汚れが発生するなどの諸トラブルが生じるので単独では全く用いることはできない。従

って、本発明の場合低摩阻系潤滑剤の併用が必要である。

二種の化合物を併用するとそれらが互いに親和性がない場合は別として通常、相溶し合って、せっかく、低摩阻系の潤滑剤を用いてもその効果が発揮されない。従って本発明で適用される潤滑剤としてはポリオキシアルキレン含有のポリエーテル系化合物と非相溶性であることが必要である。

更に本発明の場合、あらかじめ繊維表面がカチオン交換性及び非イオン吸着性に変性されているので、前記の高分子量ポリオキシアルキレン含有の脂肪族ポリエステル系化合物は優先的に繊維表面に吸着され、従って低摩阻系潤滑剤はその液膜の上に形成され、その走行摩擦低減の目的が達成されることになる。

このように、高分子量ポリオキシアルキレン含有のポリエーテル系化合物からなる極圧潤滑剤とこれに対して低摩阻系の潤滑剤とが繊維上で二層構造をとることが本発明の重要ポイントである。

本発明に用いられるポリオキシアルキレン含有

のポリエーテル系化合物と非相溶の潤滑剤は分子量が900以下の脂肪族系潤滑剤及び／又はシリコン系潤滑剤である。

脂肪族系潤滑剤としては、鉱物油、アルコールと塩基酸とのエステル類、或いは天然の油脂類などをいうが低摩阻系潤滑剤として好ましく用いられるにはオクチルパルミテート、オレイルオレエート、イソステアリルオレート等の一価のアルコールと一塩基酸とのエステルである。

この場合分子量が900を超えると粘度も高く、従って低摩阻系潤滑剤として用いることはできない。

又、脂肪族系以外の例えば芳香族を有する化合物の場合も粘度が高いため、これらも用いることはできない。脂肪族系以外の潤滑剤ではジメチルシリコンに代表されるシリコン系潤滑剤を用いることができる。中でもその粘度が300cSt(30℃で)以下の低粘度のジメチルシリコンが低摩阻性に対して好ましい。高分子量のポリオキシアルキレン含有のポリエーテル系化合物(A)と分

子量が900以下の脂肪族系潤滑剤(B)及び／又はシリコン系潤滑剤の繊維上への処理は、前記した如く、あらかじめ繊維上にカチオン交換性及び非イオン吸着性の無機化合物を固着させた後、まず化合物(A)を付与処理し、該繊維表面に該化合物の液膜を形成せしめ、その後、その上から潤滑剤(B)を付与処理せしめてもよいが化合物(A)と潤滑剤(B)とを同時に付与処理してもよい。同時付与しても前述の理由から化合物(A)は繊維側に吸着され、結果としては二回に分けて付与処理したと同様の効果が得られる。

又、これらの付与処理に際してはかかる剤を水に含有させた水系の繊維用処理液として用いてもよく、或いは、実質的に水を含まない溶媒に剤を含有させた非水系繊維処理液として処理してもよく又、更に付与処理する手段としてはオイリングローラーや計量オイリングノズル、スプレーなど公知の手段のいずれを用いてもよい。

又、処理液としては本発明の化合物(A)および潤滑剤(B)の他に制電剤など必要に応じて他

の化合物を繊維用処理剤に混合して用いてもよい。

繊維用処理剤としての付与量は繊維重量に対して 0.1~5重量%が好ましい。付与量は化合物(A)、処理剤(B)の各々が繊維重量に対して 0.1~2重量%程度の範囲が好ましい。

<発明の効果>

本発明は、繊維の加工工程で糸導ガイド上を走行する際、その走行摩擦を高めることなく、従って走行時の毛羽、糸切れを起すことなく、又、全芳香族ポリアミド繊維の本来有する高強力、高モジュラスといった優れた特性を生かしたまま表面の耐摩耗強度の高い全芳香族ポリアミド繊維を提供するものである。

<実施例>

以下に実施例によって本発明を具体的に説明する。

尚、本発明において評価に用いた特性値は次の方法に従って測定した。

(1) 繊維表面の耐摩耗強度

図-1に示すように1500デニール1000フィラメ

(1) インストロン引強試験機を用い初長25cmの繊維サンプルを20℃、65%RHの雰囲気下で引強速度10cm/分の条件で引張り切断強度を測定して、これより繊維の強度(g/de)を求めた。

(2) インストロン引強試験機を用い10cm当り40ターンの下巻及び上巻をかけた二本巻コードを(1)と同様の測定条件で測定しコードの強度(g/de)を求めた。

これらのコードの強度の繊維の強度に対する比から強力保持率を求めた。

(4) 総合判定

以上の測定法により評価した結果を総合評価し良~不良を○~×で示した。

実施例1~3、比較例1~6

テレフタル酸ジクロライドとパラフェニレンジアミン及び3,4'-ジアミノクフェニルエーテルからなるパラ全芳香族ポリアミドを紡出し、水洗を繰返し、ついで水洗後にペントナイト水分散液

ントの繊維Yの両端を一定回転(500rpm)で回転する円板1、2に取り付け、その繊維を溝3、4を通してA点にて回転が2ターンとなるように張をかけて交差させ500gの荷重6を掛けた溝5に掛ける。

尚A点での繊維の交差角は40°とし又繊維の繰返し往復ストローク長は50mmとした。

このように繊維と繊維とを繰返し擦過させて擦過切断までの時間を秒数で表わし、耐摩耗強度として評価した。

(2) 走行摩擦係数

図2に示すように糸系パッケージ1から解紡された繊維Yは糸導ガイド2を経て更にS状の強力コンペンセーター3で強力T₁を20gに調整し、表面粗度11Sの60φの円筒状摩擦体4を接触角180°で押しその山側強力(T₂)を測定後、表面速度300m/minの回転ローラー5を介して糸束を走行せしめた。このときの摩擦係数を $\mu = (1/\pi) \ln(T_2/T_1)$ で算出した。

(3) 繊維強力保持率

を付着せしめて500℃で熱延伸し非脱落性のペントナイト0.42%を繊維表面に有するカチオン交換性及び非イオン吸着性の全芳香族ポリアミド繊維(1500デニール1000フィラメント)を紡た。

この全芳香族ポリアミド繊維の延伸の直後に表1に示す組成からなる15%の水系エマルジョンを付着剤として固形分量が繊維重量に対して3.5%となるように付与し、乾燥して捲取った。

得られた繊維を前記の評価方法により、評価した結果を表2に示した。

表 1

				実 施 例			比 較 例				
				1	2	3	1	2	3	4	5
ポリ リ分 エチ ー テル	(出発物質)	(PO/EOモル比)	(分子量)								
	グリセリン	35/65	30000	10	10				65	10	10
	ブタノール	65/35	20000			10					
	"	35/65	5000				10				
オクチルバルミテート (MW 366)				50	60	60	60	65			
トリメチロールプロパントリオレート (MW 926)										60	
POE (2) ビスフェノールAジラクレート (MW 680)											60
POE (n) 硬化ヒマシ油				22	25	25	25	25	30	25	20
POE (n) ラウリルエーテル				3				10			5
ジオクチルスルホサクシネートNa				5	5	5	5	5	5	5	5
40cst (於30℃) ジメチルシリコーン				10							

註) PO:プロピレンオキシド
POE:ポリオキシエチレン
cst:センチストークス

EO:エチレンオキシド
(2):オキシエチレンのモル数2

MW:分子量
Na:ナトリウム

表 2

	実 施 例			比 較 例					
	1	2	3	1	2	3	4	5	6
繊維表面の耐摩耗強度 (秒)	210	210	190	60	15	180	170	150	4
走行摩損係数	0.28	0.30	0.32	0.29	0.28	0.41	0.40	0.44	0.28
強力保持率 (%)	72	72	71	52	50	67	69	59	51
総合評価	○	○	○	×	×	×	×	×	×

表2のうち比較例6は全芳香族ポリアミド繊維としてカチオン交換性及び非イオン吸着性無機化合物が付与されていない繊維について実施例1の組成の油剤を付与して同様に比較評価した結果を示した。

これらの結果より本発明が著しい効果を示すことが明らかである。

4. 図面の簡単な説明

図1は繊維表面の耐摩耗強度測定装置の概略図である。1、2は円板、3、4、5は滑車、6は荷重、Aは繊維の交叉点、Yは繊維である。

図2は繊維の走行摩擦係数測定装置の概略図である。1はバクテージ、2は糸導ガイド、3は張力コンペンセーター、4は円筒状摩擦体、5は回転ローラー、 T_1 、 T_2 は張力測定器である。

特許出願人 帝人株式会社
代理人 弁理士 前田純博

図 1

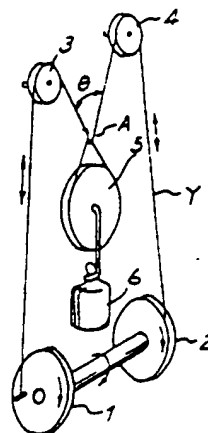


図 2

